

加賀家文書における表記の特徴と傾向 —ローマ字表記への試み—

深澤美香

0. はじめに

秋田県(八峰町)八森の加賀家はアイヌ語通辞を家業とし、18世紀末~19世紀の江戸時代に多くの資料を書き残してきた一族である。これらは現在「加賀家文書」と総称して呼ばれている。なかでもアイヌ語資料については、そのアイヌ語が近世のものであるということだけではなく、現在の標津町・別海町・根室市近郊の方言がいかなるものであったかということ調べる上でも大変貴重な資料である。

筆者は現在、当該資料の翻刻や現代語訳を進めるとともに、この地域のアイヌ語に関する研究を進めている。本稿では、加賀家文書の大部分を執筆した3代目伝蔵(1804-1874)のアイヌ語表記について試験的にまとめることにする。

2. 現代のアイヌ語表記法

アイヌ語の正書法というのは明確に定められておらず、カタカナとローマ字の両方あるいはどちらか一方で表記される。アイヌ語カナ表記に関しては、江戸時代から現在に至るまで幾度も試行錯誤が繰り返されてきたが、北海道ウタリ協会(1994)の『アコロ イタク AKOR ITAK アイヌ語テキスト1』で大部分の方針が確立され、現在刊行されているアイヌ語の辞書や教科書、教材類の多くは、これに則った形で表記することが慣習となりつつある(以下、「アコロ イタク式」と呼ぶ)。

カナ表記で最も厄介な問題となっているのが、日本語には無い閉音節の音節末の子音に対する表記法である。「アコロ イタク式」で小書きのカナ(「プ(-p)」、「ツ(-t)」、「ク(-k)」、「シ(-s)」、「ム(-m)」など)が採用されるようになり、いくぶん正確さを期する表記となったとはいえ、その方法に異論が無いわけではない。例えば、田村(1999)が新たに提案した「カタカナ音声簡略表記」や「カタカナ音声精密表記」では、「アコロ イタク式」で hotke も hokke も「ホッケ」と表記されることに対し、前者を「ホトケ」、後者を「ホツケ」と表記する方針をとっている。とはいえ、カナで表記する限り、どうあがいても子音に母音が付きまとうわけであって、音素結合や音韻交替によっては、カナ表記がかえって語形の特定を難しくしてしまう恐れもある。そのため、論文や研究書に関して言えば、今なおアイヌ語はローマ字で表記されるというのが常である。

このような表記上の問題は、江戸時代の書物にも大きな影を落としている。この時代に大量に記録されたアイヌ語が難解で、ことごとく不正確だと思われる原因には、カナ表記の不正確さが指摘されるのである。金田一京助が、探検家や旅行家の書き留めたアイヌ語に対し「殊に表わし方の不完全な仮名を以てし、しかも仮名遣いなどにはほとんど無

関心な旧幕府時代の人のエエへ、キイヒを相通にし、長く引く所には、ウフの類を勝手に書いたのは、無邪気なものではあるが恐ろしい¹と述べたことは有名な話である。

『藻汐草』を記録した上原熊次郎、さらにそれを筆写した加賀伝蔵は、探検家や旅行家ではなく蝦夷通辞として実際にアイヌ語を使って仕事をしていた人達である。もちろん、彼らがカナで記録したアイヌ語の資料には、先ほどから述べているようにカナ表記の限界からくる不精密さがある。それに、日本語の母語干渉によってアイヌ語の音素特定に欠落が生じ、その不精密さを煽るような状況にもなっているようである。それであってもなお、近世のアイヌ語を知るには一級品の資料である。そして、このような資料を現代のアイヌ語学の土俵に上げるためには、カナ表記からアイヌ語の音価を推定してローマ字化するということが必須のプロセスとなるわけである。

3. 古文献に見られるアイヌ語表記

成立年代、作者ともに不明であるが、最古のアイヌ語彙集として知られているのが『松前ノ言』(1630-40?)である。この一冊について、金田一(1924)では、早くから表記の特徴について検証がなされ、佐藤(2008)が「松前ノ言」の仮名と引証形式との対応関係をまとめている。

上原熊次郎の著作である『蝦夷語箋』については金田一(1917)が、『蝦夷語集』(1824)については金田一(1917)や成田(1985, 1988)が、その表記法について解釈を施している。『蝦夷語集』は、『藻汐草』以降の上原の著作であり、アイヌ語の収録語彙も9380語と3.4倍近く増えている。上原自身も『藻汐草』成立時のアイヌ語表記に不満であったのか、この著作では、『藻汐草』で使用の無かった「井」という文字を *ye* や *we* という音価を表すのに用いるようになっている²。

『藻汐草』のアイヌ語表記については、田中・佐々木(1985)がその表記法をまとめた。『藻汐草』において、上原がアイヌ語の /tu/ を「ツ」という文字で記録したことは、金田一京助が評価したことで知られているが、田中・佐々木(1985)は、この表記について、「徹底されているわけではなく、ツもトも併用される」と指摘した。また、加賀家文書の『蝦夷方言 藻汐草 [写]』の表記についても若干の言及があり、「伝蔵自身の書き癖によって、ツをトに、チをツに、二重母音の *y* にあたる *i* を *e* に直したり、長音符号を省いたりなどの訂正もなされている」としている。これらの比較研究については最後に検討することにし、次節では、カナ表記の傾向を踏まえた上で、加賀家文書の表記法と音素推定に関する整理を試みる。

4. ローマ字表記法

本節における主な使用テキストについては、以下の通りである。詳しい書誌情報につい

¹ 金田一(1917: 495)。

² 「井」については、成田(1985, 1988)が詳しい。

では省略するが、誰か別の人が書いたものの写本ではなく、加賀伝蔵が自力で書いたものであろうと思われるものを選んだ。

- ・「菊のかんざしみだれ髪」『御手本』(資料番号 31)
- ・『学校往来夷解書上』(資料番号 40)
- ・『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②]』(資料番号 51)
- ・「西松おその」『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①]』(資料番号 28)

例の後に続く番号は、最初の 2 桁が資料番号、次の 3 桁が丁数で、オは表、ウは裏を示し、最後の 2 桁は行数を表す。アイヌ語の解釈に関して、『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②]』は旭川アイヌ語研究会 (2011) を、「菊のかんざしみだれ髪」は深澤 (2013) を参照した。

4. 1. アイヌ語の音素と音節

アイヌ語の表記法を見るにあたり、アイヌ語の音素と音節について確認しておくことにする。アイヌ語の音素は、5 つの母音と 11 の子音 (声門閉鎖音を入れると 12 の子音)³ から成り立っている。

母音 : a, e, i, o, u

子音 : p, t, k, c, s, r, m, n, w, y, h, (')

子音の y と w は半母音であるが、音節の副音としてしか用いられない⁴。p, t, k, c には無声・有声、無気・有気の対立がない。

アイヌ語の音節は、次の 4 種類である (V : 母音、C : 子音)。

V、CV、VC、CVC

ただし、c と h の子音は音節末に立つことができないという制限がある⁵。子音が連続するのは二つまでであり、子音が連続した場合は必ずその間で音節が切れる。また、VCV という音素配列であれば、通常、一つ目の V の後ろで音節が切れる。

³ 声門閉鎖音の '([ʔ]) については 4.5.2 節で簡単に触れる。

⁴ y と w を明確に「子音」として扱ったのは、知里 (1942: 406-462) であり、「いわゆる重母音」という項目で、アイヌ語の重母音がウを副音とする系列とイを副音とする系列とにわかれるということを指摘している。これ以前にも Pilsudski (1912) が、j (= y) と w は i と u が子音化したものと指摘しているが、その時点では音声的にしか扱っておらず、これらを母音の範疇としていた。

⁵ 樺太方言では h が音節末にも立つことができる。

例：i.ku「酒を飲む」、ay.nu「人間」、po.ron.no「たくさん」、tan.to「今日」
(ピリオドは音節の切れ目を表す)

4. 2. 母音と半母音

加賀家文書における単母音の表記は、「ア」、「イ (まれにヰ)」、「ウ」、「エ」、「ヲ」のおよそ5つで成り立っている。江戸時代のアイヌ語資料全般に見られる特徴として「エ」は「エ」、「オ」は「ヲ」で表記されるということが言われているが⁶、加賀家文書も例外ではない。また、資料によっては、「イ」が「ヰ」と表記されている場合もあるが、数はごく僅かであって、主に「イ」が使用される。音価を推定した際、以下のような可能性が考えられる。

(1) 母音【V】

ア：a
イ：i/e
ウ：u
エ：e/i
ヲ：o/u

加賀家が秋田の八森の出身であることを考慮すると、音素特定の際に障害となるのが、「イ」と「エ」の区別である。日本語の東北方言では /i/ と /e/ を音韻的に区別しないことが知られており、秋田県の八森あたりの方言でも、これらの母音を副音とする場合には区別なく [e₁] と発音される。副音ではない場合も、例えば「息」、「苺」、「井戸」、「鯉」などの「い」は [e₁] と発音される⁷。このことがアイヌ語表記にも影響しているようで、加賀家文書では「イ」と「エ」のカナが、アイヌ語の /i/ と /e/ のどちらの音素を表すのにも使われている。

さらに、日本語母語話者による誤りとしてよく知られているのが、アイヌ語の /u/ と /o/ の音韻的な区別である。このことは、金田一 (1917 [1960]: 495) によって「日本語の特に東北人の u の発音は平唇で、アイヌの u を聞くと、o のように聞く」と指摘されている。時代や地域、個人によって音声も少しずつ異なるが、アイヌ語の u は、唇の丸めが強く、唇を前に突出すようにして口の奥のほうで調音されるなどと言われており、東北の中舌母音の [ü] /u/ に近く響いたことが原因であると考えられる。加賀家文書でも、「ヲ」が /u/ を表すのに使用される。

⁶ 田中・佐々木 (1985)、成田 (1988) など。

⁷ ただし、佐藤喜代治 (1963) によれば、八森では「胃」や「胆 (い)」を [ji]、「糸」を [i] で発音し、「柄」や「絵」を [je₁] と発音するという特徴があり、語によって多少の出入りはあるが、/i/ と /e/ の音韻的な区別が全く無いわけではないようで、この点には注意が必要かもしれない。

アイヌ語で母音が連続する場合は、音素間に声門閉鎖音が入るのが基本である（これに
 関しては、ただ母音を連続して書けばよいので省略する）。違う母音が続く場合に限り、そ
 こにアクセントが無ければ /i/ や /u/ は /y/ や /w/ に半母音化し、それ以外の母音であれ
 ば音素間にわたり音の /y/ や /w/ が挿入されることがある⁸。これを現在のアイヌ語ローマ
 字表記に合わせると、次のように表される。

(2) 半母音【C】

イ／エ：y

ウ／ヲ：w

例)	アイヨッへ	: ayokpe	「鎧」(31032 ウ 12)
	アエ子	: ayne	「～あげく」(31040 オ 07)
	カモイ／カモエ	: kamuy	「神」(31041 ウ 07, 31041 オ 05)
	ウコイタク	: ukoytak	「互いに話をする」(31036 オ 07)
	ヲエラ	: oyra	「～を忘れる」(31036 オ 05)
	パウツ	: pawci	「淫魔」(31035 ウ 09)
	サヲレ	: sawre	「ゆるい」(31039 オ 01)
	ニウケシ	: niwkes	「～をしかねる」(31039 オ 04)
	ケウトモ	: kewtumu	「～の心」(31036 ウ 07)

-iw や -ew を一音節とする際の w は「ヲ」よりも「ウ」で表す傾向にあるようで、主に
 ここで対象とした資料には見つからない。論理的な可能性としてはあってもおかしくはな
 いので、用例が出てくるのを待ちたい。

また、少々変則的ではあるが、アクセントの無い母音については「ユ」や「ヨ」で書か
 れることがある。

(3) アクセントの無い母音【V】

ユー：i-

ヨー：o-

例)	ユルシカ	: iruska	「立腹する」(31037 ウ 05)
	ユワトベニ	: iwatopeni	「紅葉」(31035 オ 03)
	ヨカ	: oka	「～の後ろ」(31042 オ 09)

⁸ アクセント音節と半母音化の関係については、白石 (1998) が詳しい。また、奥田 (1998) に
 よって、静内方言でわたり音挿入と声門閉鎖音挿入がそれぞれ対立していることが報告されてい
 る。

アイヨッへ : ayokpe 「鑑」(51032 ウ 12)

(4) 母音+半母音【VC】

イ/エ/ユ : ey

ヲ : ow

例)	イコエサンバ	: eykoysampa	「～を真似る」(40008 オ 08)
	エコイサンバ	: eykoysampa	「～を真似る」(40005 ウ 04)
	ユワンケ	: eywanke	「～を使う」(40004 オ 08)
	ヲベカ	: owpeka	「まっすぐに」(31035 ウ 07)

アイヌ語には wi-、-iy、-uw を一音節とする音素配列が無いことや、-yi-、-wu- という音連続は形態素間でのみ生じるという制限がある。次の (5) に関して、例えば「ウエ」という表記は wi とはならず、we か ue などを実現することになる。「ウ」一文字で wu になることは(形態素間でのみ生じるという制限上)まず無いが、「エ」と「イ」はそれぞれ一文字で ye もしくは we を、「ヲ」は一文字で wo を表すことはある。

(5) 半母音+母音【CV】(ヤ行とワ行)

ヤ : ya

ユ/ヨ : yu

エ/イ : ye

ヨ : yo

ワ : wa

(ウ) エ/イ : we

ヲ : wo

例)	マツヤ	: maciya	「町」(31033 オ 03)
	ユク	: yuk	「鹿」(51025 ウ 08)
	ヨブケ	: yupke	「強い」(31042 ウ 05)
	ノエ/ノイ	: nuye	「～を書く」(31036 ウ 09, 31036 オ 09)
	バヨカイ	: payokay	「行き来する」(40009 ウ 08)
	ヲロワ	: orowa	「それから」(31038 オ 09)
	ハウエ	: hawe	「～の声」(31037 オ 09)
	ルエ/ルイ	: ruwe	「こと、の」(40011 ウ 02, 40002 オ 06)
	ワヲ	: wawo	「アオバト」(31033 ウ 05)

4. 3. 開音節：子音+母音【CV】

4. 3. 1. 基本形

「子音+母音【CV】」の場合も (1) の規則に準じるので、カナ表記上、i、e、o 列の母音で表される場合は、幾つかの実現可能なレパートリーを持つことになる。副音が u であっても o 列のカナで書かれたり（例：モ /mu/）、副音が i であっても e 列のカナで書かれたり（例：キ /ke/）ということは普通にある。よって、「子音+母音【CV】」を一音節とする場合は、(1) の母音の規則に注意しながら、カナをそのままローマ字で表記すれば概ねそれで問題はない。加賀家文書では、「ネ」は常に「子」と表記される。

(6) 子音 (k, s, r, m, n, h)+母音【CV】（タ、ヤ、ワ行を除く）

カ、キ、ク、ケ、コ : ka, ki, ku, ke, ko
サ、シ、ス、セ、ソ : sa, si, su, se, so
ナ、ニ、ヌ、子、ノ : na, ni, nu, ne, no
ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ : ha, hi, hu, he, ho
マ、ミ、ム、メ、モ : ma, mi, mu, me, mo
ラ、リ、ル、レ、ロ : ra, ri, ru, re, ro

(6) のほか、①ハ行は語末や語中ではこれらが濁音・半濁音を示している可能性が非常に高いということ（「濁音・半濁音」を参照）や、②同様の表記であっても母音が後続しない単独の子音を表していることもある（「音節末の子音」を参照）ので注意しなければならない。

タ行とハ行についてはカナ表記からローマ字表記に変換する際に特殊なふるまいをするため、(7) として別記する。

(7) 子音 (t, c)+母音【CV】（タ行）

タ : ta
チ／ツ : ci
ト : tu
テ : te
ト : to

例)	タン子	: tanne	「長い」(31041 オ 07)
	チセ／ツセ	: cise	「家」(31044 オ 03, 31034 オ 03)
	カト	: katu	「～の様子、～のふり」(31040 ウ 03)
	テキ	: teke	「～の手」(31041 オ 03)
	コトモ	: kotom	「～かのように見える」(31042 ウ 09)

アイヌ語には /ti/ や /tsu/ が無く、/ci/ を表すために「チ」と「ツ」の二つの表記を使用する。これは日本語秋田方言で「チ」と「ツ」が両者ともに [tsi]/ci/ であるとする事実と反さないものである⁹。アイヌ語の /tu/ という音は、上原熊次郎の『藻汐草』で「ヅ」という表記が採用されたことでよく知られているが、加賀家文書ではこれを「ト」や「ド」で表すことが多い。「ツ」や「ヅ」で表されていることもあるが、『藻汐草』の表記に引っ張られている可能性が高く、本意では無いように見える。

4. 3. 2. 濁音・半濁音【CV】

アイヌ語は音韻的に清濁の区別（無声音と有声音の区別）が無い言語である¹⁰。よって、現在のアイヌ語表記では、全て無声破裂音のローマ字表記で表され、それに従うと以下のようになる。

(8) 濁音と半濁音【CV】（ガ行、バ行、パ行）

ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ : ka, ki, ku, ke, ko

バ、ビ、ブ、ベ、ボ : pa, pi, pu, pe, po

(パ、ピ、プ、ペ、ポ : pa, pi, pu, pe, po)

ザ行とダ行についてはアイヌ語と日本語の音価の違いが明確に現れる。ザ行は、先立つ子音が /c/ であることを示す。「ズ」と「ヅ」については実例が確認できていないため未詳であるが、日本語秋田方言で「ズ」は「ジ」([dzi]/zi/) と区別しないため、もし見つかればそれは /ci/ を表すのであろう¹¹。ダ行はタ行が表すものと音韻的な区別はない。

(9) 濁音と半濁音【CV】（ザ行、ダ行）

ザ、ジ、ゼ : ca, ci, ce

ダ、ヂ、ヅ、デ、ド : ta, ci, ci/tu, te, to/tu

半濁音は何かの写本である場合に突如として現れる程度のもので、基本的には濁音表記が使用される。濁音表記の用例としてはバ行が最も多く、その他については用例がぐんと低くなることから、ここでは具体例を挙げず、今後の検討課題として残しておくことにする。また、「ブ」については、/pu/ ではなく、母音を抜かした /p/ である可能性が極めて高い。これについては4.4節で詳しく述べる。

⁹ 例えば、「土」と「乳」が [tsitsi]/cici/、「靴」と「口」が [kütsi]/kuci/ になるなど。(佐藤喜代治 (1963 : 11) ; アクセント記号は便宜上省略した。)

¹⁰ 清濁の区別が無いことは、金田一(1913) が「清濁全く相通ずる」と指摘した。知里(1942) からはローマ字による書き分けが無くなる。

¹¹ 例えば、「地図」と「知事」は [tsĩ'dzi]/cizi/、「くじ」と「屑」は [kü'dzi]/kuzi/ など。(佐藤喜代治 (1963 : 11) ; アクセント記号は便宜上省略した。)

4. 3. 3. 拗音【CV】

アイヌ語にはそもそも拗音が無く、「キヤ」、「ニヤ」、「ヒヤ」、「ミヤ」、「リヤ」等という音は存在しない。「アコロ イタク式」で「チャ、(チ,) チュ、チェ、チョ」は **ca**、**(ci、) cu、ce、co** にあたる。「シャ」と「サ」は音声的には存在するけれども音韻的な区別が無いため、**sa**、**(si、) su、se、so** を表す際、「アコロ イタク式」では「サ、(シ,) ス、セ、ソ」に統一している。尚、加賀家文書が執筆された時代の日本語は、拗音に小書きが採用されていないためアイヌ語のカタカナも小書きではなく、ここでもそのまま小書きにせず書き表すことにする。

(10) 拗音【CV】(シャ行、チャ行)

シャ、シユ、シヨ : **sa, su, so/ su**

チャ、チウ、チェ、チヨ : **ca, cu, ce, co/ cu**

例)	シャハ	: sapa	「頭」(31033 オ 01)
	クシユ	: kusu	「〜ので」(31034 オ 05)
	シヨモ	: somo	「〜(シ/で) ない」(31036 ウ 03)
	アシヨロ	: asur	「噂」(28050 ウ 03)
	アチャボ	: acapo	「父親」(31043 ウ 03)
	チウツク	: cuk	「秋」(31035 オ 03)
	チエツプ	: cep	「魚」(51039 オ 11)
	カッチヨ	: katco	「太鼓」(28048 ウ 05)
	チヨク	: cuk	「秋」(51037 オ 01)

加賀家文書では「チウ」が /cu/ に対応するので、「チュ」が /cu/ に対応する例はまず見つからない¹²。『藻汐草』の写しである資料番号 49 には「チュ」という表記が多く見られる。また、「チェ」が /ce/ にあたるの対し、「シエ」が /se/ にあたる例は見つかっていない¹³。

/ci/ は「ツ」で表すことができるが、/ca/、/cu/、/ce/、/co/ が「ツア」、「ツウ」、「ツエ」、「ツヲ」と表記される例は今のところ見つかっていない。「ツイ」の例も殆ど無いが、/ci/ に対応する例が現段階で一件見つかっている。

(11) 拗音【CV】(ツイ)

ツイ : **ci**

¹² シイチユク : **sicuk** 「仲秋」(31016 ウ 02) という例がかるうじて見つかる。(「九月御節句被下物申渡」『御手本』)

¹³ シエベ : **siipe** 「鮭」(31026 ウ 02) という例があるが、これは「シ」/si/ 「エ」/i/ 「ペ」/pe/ であり、「シエ」が /se/ を表しているわけではない。([アイヌ語解の歌(抄)]『御手本』の例である。)

例) ツイシ : cis 「泣く」(31041 ウ 05)

加賀家文書『イロハ蝦夷言』(資料番号 38)に「ツイ」が /tu/ を表す例として「ツイナシノ (tunasno)」という例がある。これは「早く」という意味のアイヌ語であるが、もし伝蔵が書けば「トナシノ (tunasno)」(31039 ウ 07)と表記されていそうなものである。何かを写したのか、筆者が伝蔵ではなく別にいるなどという恐れもあり検討を要する(/tu/の主な表記法については、(7)と(9)を参照)。

また、/ka/ や /ga/ が、日本語秋田方言では合拗音の /kwa/ や /gwa/ で発音されることがある¹⁴。これは、日本語からの借用語やカナ書き(一時的な借用を含む)場合に見られる。

(12) 合拗音【CV】(クワ)

クワ : ka

例) クワナツ : kanaci 「少女、娘 (< 雁の字)」(31044 ウ 07)
クワンノン : kannon 「観音」(51022 オ 05)

『役土人申上和解書扣上』(資料番号 39)などには「会所」のことをアイヌ語文中で「クワエシヨ (kayso)」と書いている例も見つかっている。

4. 4. 閉音節 : 母音+子音【VC】 / 子音+母音+子音【CVC】

4. 4. 1. 基本形

アイヌ語は閉音節の使用が珍しくない言語であり、日本語の撥音便や拗音にあたるもの以外に音節末の子音 (-p, -t, -k, -s, -r, -m, -n, -w, -y) が存在する。ここでは促音や撥音 (-t, -m, -n)、半母音 (-w, -y) で表されるもの以外を扱う。

どの母音が副音となる可能性も考えられるのであるが、/u/ と /i/ を副音とするものが最も多く、/a/ と /o/ を副音とするものはごく僅かである。その傾向を示すために頻出するものを(13)に記載する。

(13) 音節末の子音【-C】

ーキ／ーク : -k
ーシ : -s
ーヌ／ーノ : -n
ーフ／ーブ : -p

¹⁴ 秋田県八森の話者で、/kwa/ という合拗音をもつ語彙例は、「火事」、「西瓜」、「懐中時計」、「外国」、「薬罐」、「元旦」、「正月」、「桑」、「鋏」などである。(佐藤喜代治 1963 : 23)

—ム／—マ／—モ : -m
 —ラ／—リ／—ル／—レ／—ロ : -r

佐藤喜代治 (1963) によると、秋田の多くの地点(八森も含む)では /k/ 列の子音のうち、/ki/ の子音は硬口蓋の強い摩擦音 [kçi] (または[kci]) であり有気音であることが多く、「相対的に母音が弱く発音される成果、共通語のキよりむしろクに近く聞えるようなこともある」(p. 13) ということである。日本語秋田方言のシとスの母音は、両方とも中舌音の [i] であり、音声的にはこの方言の /i/ 列と解釈されている¹⁵。

例) バテキ : patek 「(ただ) ~だけ」(31034 オ 05)
 キマテク : kimatek 「あわてる」(31037 オ 05)

音節末の子音 /s/ については「シ」が採用される。これに関しては、「アコロ イタケ式」のアイヌ語カナ表記でも「ス」ではなく「シ」を一律に用いるぐらいであって、日本語母語話者には「シ」に響くことが多い。もっとも、田村 (1998 :42) は「発話の末尾やポーズの前では、シの子音が出るのが多く、そのためカタカナ表記でも小さい シ を書くことになっているが、いつも シ に似た音色を持つわけではない」としたうえで、母音 u の後や、p、k の前、w の前に s が置かれた時には、スのような音色をもつことがあるとの見方を示している。確かに、上原熊次郎の『藻汐草』には「イスカグル (iskakur) 「盗人」」のような例もあるわけで、伝蔵がこのような環境においても一律に「シ」で表そうとした点¹⁶ は注目すべきかもしれない。

例) ヲロシベ : oruspe 「話」(31037 ウ 05)
 ニシハ : nispa 「旦那」(31033 オ 03)
 セシケ : seske 「~を閉める」(31042 オ 09)

/n/ は 4.4.2 節の撥音で表されることが殆どであるが、「ワ」の前の /n/ は「ヌ」と表記されることがあり¹⁷、そのほかの環境でも「ヌ」や「ノ」で表示されることがある。音節末の子音 -m は「ム」や撥音で表されることが多いが、特定の語に限り「マ」や「モ」でも表される。

例) アヌワ : an wa 「あつて、いて」(31042 ウ 01)
 ウエトレヌ : ueturen 「~と一緒にいる」(31036 オ 01)

¹⁵ 「この方言では /zu/・/su/・/cu/ に当たるモーラが欠けている」(佐藤喜代治 1963: 11)。

¹⁶ w の前に s が置かれた用例は、今回主に対象とした資料に見つからなかった。今後も調査を続ける必要はある。

¹⁷ 田村他 (1998) が「n の後に wa が続く場合」として詳述している。

ホコノ	: pokon	「(まるで) ~のように」(31034 オ 09)
ケム	: kem	「血」(31035 ウ 09)
イシヤマ	: isam	「~が無い」(31036 オ 07)
シシヤモ	: sisam	「和人」(31035 ウ 07)

音節末の子音 **-p** は「フ」や「ブ」で表されるが、促音を用いることでも表示される（詳しくは 4.4.3 節で述べる）。

例) ツラマンテフ	: ciramantep	「獲物」(51025 ウ 05)
ウセブ	: usep	「反物」(31033 オ 07)

ラ行の子音末尾音は、次に響く母音の音が多様に聞こえることで有名であって、「アコロイタク式」のアイヌ語カナ表記でも、前に来る母音に合わせて「ラ、リ、ル、レ、ロ」を使用することになっている。加賀家文書でも全てが使用される。

例) ウヌカラ	: unukar	「互いを見合わす」(31042 オ 07)
モシリ	: mosir	「国」(31033 オ 01)
ウムレクル	: umurekkur	「夫婦」(31034 オ 03)
ウタレ	: utar	「人々」(40002 ウ 10)
コロ	: kor	「~を持つ」(31034 オ 05)

4. 4. 2. 撥音【-C】

撥音は **n** または **m** で表す。特に両唇韻 (/p/, /m/) の前は音声的に [m] になるのだが、その形態素や語源にまで遡って表記分けされる傾向がある。ここでは、そのような状況も認めつつ、以下のようにまとめる。

(14) 撥音【-C】(ン)

—ン	: -n
—ン (+バ/パ/マ行音)	: -m

例) コタン	kotan	「集落」(31033 オ 01)
シャランベ	saranpe	「絹織物」(31033 オ 07)
カンビ	kampi	「紙」(31036 オ 09)
テンコロ	temkor	「~を抱く」(31045 オ 01)

4. 4. 3. 促音【-C】

促音の「ツ」は小書きになっていることがあるが、大小の判断がつかない場合も多い。他にもパターンとして有り得る可能性はあるが、現段階で得られた情報を基にまとめると(15)から(17)の三種類に分けられる。

(15) 音節末の p, t, k を表す促音【-C】(ツ／ッ)

ーツ／ーッ : -p/ -t/ -k

例)	ホツハ	: hoppa	「～を残す」(28064 ウ 05)
	ラツケ	: ratki	「垂れ下がる」(31041 オ 01)
	アツバケ	: atpake	「最初」(40002 ウ 08)
	カッチヤマ	: katcama	「～の様子」(31040 オ 01)
	テツテレケレ	: tetterekere	「～を飛び跳ねさせる」(31045 オ 01)
	エタツテ	: itakte	「～に話させる」(51040 オ 04)
	ウムレツクル	: umurekkur	「夫婦」(31043 ウ 07)

(16) 語末¹⁸ の t や k を表す促音【-C】(ツ／ッ)

ーツ／ーッ : -t/ -k

例)	オワツ	: owat	「蛙」(31039 オ 09)
	ウムレツ	: umurek	「夫婦」(31039 オ 07)

(17) 語末の p や k を導く促音【-C】(ック／ッフ)

ーック : -k

ーッフ／ーッブ : -p

例)	チウック	: cuk	「秋」(31035 オ 03)
	チウッフ	: cup	「月」(51037 オ 01)

アイヌ語(北海道方言)の音節末には、-c, -h が立たないため、「ーツツ」が -c、「ーッフ」が -h になることはない。-k を表す場合は(17)か(13)が主に使用されるため、(16)は -k よりも -t を表す場合が多い。

¹⁸ (16)と(17)でいう「語末」は「音韻語の語末」を指す(「音韻語」はDixon(2010: 3)より。注20も参照のこと)。

4. 5. その他

4. 5. 1. 長音【V/VC/VhV/V'V】

長音は、長音符で表される場合と、直前の母音と同じ段の母音を入れる場合2通りである。直前の母音が /e/ 列や /i/ 列の場合は「エ」と「イ」のどちらも有り得る。アイヌ語北海道方言は母音の長短（音節の長短）を区別せず、それによって別の意味になるということはないためローマ字表記ではこれを無視するが¹⁹、アクセントの有る方言と無い方言の別があり判断しがたい。特に長音が用いられた場合は、ほぼ全てにおいてアクセントのある音節と言えるため、アクセントの別（あるいは長短の別）の片鱗が見られる。特に第一音節にアクセントがくるものは（通例、アイヌ語は第二音節にアクセントがおかれるため）例外アクセントと呼ばれるのだが、この類のものに長音が使用されている。このほか、所属形を持つ語については長音が使われることで所属形を表している可能性があること、音節末の半母音や母音連続を表す場合があること、1モーラの文法語²⁰に長音が使用されやすいことなどがある。

(18) 長音【V/VC/VhV/V'V】

ー／ア／イ／ウ／エ／ヲ : 例外アクセント、所属形 (VhV)、
音節末の半母音 (VC)、母音連続 (V'V)

例) ニイ	: ni	「木」(40002 ウ 02)
リエ	: ri	「高い」(51036 ウ 16)
ヤー	: ya	「陸」(51037 オ 11)
ナー	: na	「まだ」(51039 オ 04)
キー	: ki	「～をする」(40009 ウ 02)
ルウ	: ru	「道」(40009 ウ 08)
ボウ	: pó(ho)	「(～の) 子」(51039 ウ 03)
レイ	: réhe	「～の名前」(31034 オ 07)
ツセー	: ciséhe	「～の家」(31044 ウ 01)
バアセ	: páse	「重い」(40002 ウ 10)
ナア	: néa	「その」(40007 ウ 04)
ニイテキ	: nítek	「枝」(31035 オ 01)
シイシヤク	: sísak	「熟した」(31035 ウ 09)

¹⁹ 母音の長短が無いことは、Batchelor (1887) の頃から指摘されていたが、金田一 (1931) で改めて説明が施されている。

²⁰ 「文法語 (grammatical word)」とは、文法的な（すなわち形態的・統語的な）原理の全てにおいて規定される語のことを言う。これに対して、音韻的な原理の全てにおいて規定される語を「音韻語 (phonological word)」と言う（詳しくは、Dixon (2010: 3) を参照のこと）。

モーモッベ	: momok pe ²¹	「小間物」(40008 ウ 06)
エンカ子ーベカ	: inkaneypeka	「決して～するな」(31036 ウ 03)

古文献のアイヌ語に関する長音表示については、田中 (1989) などによって、「アクセント核のある音節が、長音符号「ー」を用いて表記される場合がある」(p. 29) と指摘があるものの、あまり明確なことは言えない。ローマ字表記のための指標としては欠かせない情報であるには違いないため、ひとまず例を挙げるに留めて今後の研究に委ねることとする。

4. 5. 2. 声門閉鎖音 [(C)]

アイヌ語北海道方言では（一部の方言を除き）長母音と短母音の区別がない。母音が2つ連続し、それらが同一の音韻語に属する場合は、概ねその間に声門閉鎖音 [(?) (あるいは、わたり音 [w], [y]) が入る。声門閉鎖音はカタカナでは特記されないが、アイヌ語ローマ字表記では子音に続く母音が連結しないことを示すために声門閉鎖音を表記することがある。

(19) 声門閉鎖音 [(C)]

表記なし : ' [(?)

声門閉鎖音 [(?) を音素（一つの子音）とみなすかどうかは研究者によって立場が異なる。声門閉鎖音を音素とみなす立場は、母音が連続する場合に声門閉鎖音が入るという特徴をひとつの根拠にしている。これに対して、声門閉鎖音を音素と認めない立場は、声門閉鎖音の有無が（例外はあるものの）意味特徴に影響しないことや、語頭の声門閉鎖音が不規則に脱落することなどが十分に説明できていないことを指摘している

声門閉鎖音は、たとえそれを音素と認める研究者であっても、現れる可能性のある位置が規則的であるため、表記上は省略するのが近年の傾向である。一方、音素と認めない研究者でも、VCV という音素配列において、例外的に²² 子音の後ろで音節が切れ、さらにこれらが同一の文法語内に含まれる場合は、分かりやすいように VC'V と表記するのが慣例となっている。

例) ay'ay 「赤ちゃん」、hioy'oy 「どうも」

声門閉鎖音は音節頭にしか立たないというのもよく言われることであるが、語末（音韻語末）の母音（特に a、e、o）の後ろは声門閉鎖音が起こりやすい環境であり、話者によってはかなり規則的に表れることもある。

²¹ momok のアクセント位置については未詳だが、これもまた例外アクセントなのかもしれない。

²² VCV の場合は多くが V.CV となり、VC.V という音節の切れ目をもつ文法語は少数である。

5. 加賀家文書の表記の特徴

江戸時代（寛政期～文政期）に活躍していた蝦夷通辞に上原熊次郎²³ という人がいる。彼は、寛政4年(1792)に、日本で初めて『藻汐草』という日本語・アイヌ語辞書を編んだ蝦夷通辞で、後世のアイヌ語学に影響を与えた人でもある。この著作は出版されて出回ったため、類本や写本が各地で発見されることも珍しくなく、蝦夷通辞の加賀伝蔵も『蝦夷方言 藻汐草 [写]』（資料番号 49）という写本（類本）を残している。この加賀家文書の藻汐草は上下に分れており、藻汐草そのものが写された箇所を上とすると、下は『藻汐草』の天地部・人物部の和語見出しをベースに選り抜きの語彙だけを記載し、そこに語源解を付加した、伝蔵オリジナルの語彙集となっている。

従って、本稿では、上を「藻汐草 [写]」、下を「[蝦夷語和解]」²⁴ と区別して呼ぶことにする²⁵。『蝦夷方言藻汐草 [写]』のアイヌ語表記法は、上原熊次郎のものとは一風変わっており、本稿ではこれらを比較対照させることで、伝蔵独自の表記法についてまとめることにする。

最後に、上原熊次郎の『藻汐草』と加賀家文書の『蝦夷方言 藻汐草 [写]』の2種の写本（類本）とを比較する。ここでは、田中・佐々木(1985)の「伝蔵自身の書き癖によって、ヅをトに、チをツに、二重母音の y にあたるイをエに直したり、長音符号を省いたりなどの訂正もなされている」という点を検証すべく、これに沿った形で調査する。

5. 1. 書誌情報

以下、『藻汐草』書誌情報を簡略的に箇条書きで記載する。

①『もしほ草』²⁶（一冊本）

- ・題簽：『もしほ草』、見返し：白紙、序題：『藻汐草』、目録題：『蝦夷方言』、柱書：『藻塩草』
- ・成立年：寛政4年(1792)、刊行年：文化元年(1804)
- ・著者：通詞 上原熊次郎、支配 阿部長三郎（跋文に記載あり）
- ・序文：白虹斎〔最上徳内〕
- ・収録語数：約 2740 語
- ・丁数：103 丁
- ・分類：天地・人物・支體・世事・口鼻耳目心・器財・鳥獸・草木・品目・助辞・熟語

²³ 生没年については不詳だが、最上徳内の『渡島筆記』に松前生まれという記録が残っている。

²⁴ 「[蝦夷語和解]」は秋葉(1989: 703-721)に翻刻があり、別海町郷土資料館(2005: 353-376)にも「アイヌ語辞典(和訳)」として記載されている。

²⁵ 別海町郷土資料館(2012)の目録は、書名を『蝦夷方言 藻汐草 [写]』とし、上下を合わせて「[蝦夷語和解]」と呼ぶ。また、同綴の後半部には「根室国境区域」という地名解も収録されている。

²⁶ 変体仮名が使用されているため、「もしほ草」とも書ける。

- ・日本で初めての日本語・アイヌ語辞書。田中・佐々木 (1985) によって、甲本と乙本の別があることが指摘されている²⁷。

②『蝦夷方言藻汐草』（二冊本）

- ・題簽：『蝦夷方言藻汐草』、見返し：『蝦夷方言藻汐草 鈴驥園蔵』、序題：『藻汐草』、目録題：『蝦夷方言』、柱書：『藻塩草』
- ・著者：（跋文削除のため記載無し）
- ・序文：白虹齋〔最上徳内〕
- ・『もしほ草』の再板本で、一冊本よりも残存数が多いとされている。田中・佐々木(1985)は、「流布本である二冊本は、管見の限り、系統的には甲本のながれにあるようだ」としている。

③「藻汐草 [写]」（加賀家文書『蝦夷方言 藻汐草 [写]』）

- ・題簽：なし、見返し：白紙、序題：『藻汐草』、目録題：『蝦夷方言』
- ・成立年：寛政4年 (1792)（跋文より）
- ・著者：同片手 加賀屋傳蔵、通詞 上原熊治郎、支配 阿部長三郎（跋文より）
- ・序文：白虹齋〔最上徳内〕
- ・跋文最後に「上」とあり、これが上段部であることを意味している。田中・佐々木 (1985) は、この写しについて、「乙本系統を写したもの」とみなし、「若干見落とした語彙もあるが、比較的しっかりしている」とし、「代表的な善本」と評価する。

④「[蝦夷語和解]」（加賀家文書『蝦夷方言 藻汐草 [写]』）

- ・序題・目録題・序文・跋文：なし
- ・「藻汐草 [写]」に続く下段部。天地部・人物部を抜粋し語義語釈を付す。

本稿では、上原熊次郎の著作である①と②を合わせて『藻汐草』と呼ぶことにする。比較対象には田中・佐々木 (1985) の指摘からも初板①の乙本系統が望ましいが、筆者が現在アクセスできるのが甲本しかないため、便宜上それを用いることにする。

5. 2. 表記の比較

4節で説明した規則に当てはまらない場合や、音素を特定しかねるような場合は、方言差や文法（形態素の結合価）などを考慮し、そこで推定される最も適切な形を箱括弧（〔 〕）に入れて表記する。これを発表者は「推定形」と呼び、今後の検討課題を含む単語として他

²⁷ この二種の別について、佐藤 (2007) は、「『乙本』は筆者が目撃した限りではこれまでのところ北大本「旧記 662」しかない。「乙本」の位置づけの確定には、乙本に属する諸本のさらなる検討が必要ではないかと思われる」と指摘する。

と区別しておくことにする；例) エシウナ：[esna]「くしゃみ」。

アイヌ語カナ箇所の括弧書きで、例えば「ラルウツ(ド)(トル)」などと記されている箇所は、縦書き本文の「ツ」の横に「ド」と「ト」と並べて書いてあるということを示す。

5. 2. 1. /tu/ の表記

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) ツ → ツ/ツ

イヅゝ子	イツゝ子	—	医者	[itutune?]	(医者?)
ポペヅク	ポベヅク	—	肝	[popetuk?]	(肝?)

(2) ツ → ト/ド；ヅ → ツ → ト

ツルケシ	ツルケシ	トルケシ	なまず	turkes	ほくろ、癩
ラルウツル	ラルウツ (ド)(ト)ル	—	眉の間	rarutur(u)	(~の)眉の間
ポネヅンコニ	ポ子ツ(ト)ン コニ	ポ子トンコニ	骨痛	pone tum koni	骨の中が痛む

(3) ツ → ド/ト

ケウシユヅ	ケウシト	ケウシト	伯父	kewsutu	~のおじ
セヅル	セトル	セトル	脊	setur(u)	(~の)背
ヅツク	ドツク	ドツク	癒ゆる	tuk	(傷が盛り 上がって) 治る
ヘヅク	ヘドク	—	産	hetuku	生れる

(1) から (3) は原典の『藻汐草』が「ツ」や「ツ」(または「ト」) で表している /tu/ に関する変遷である。「藻汐草 [写]」に注目すると、半濁点を取り除いただけの (1) や、「ト」や「ド」という書入れのある (2)、既に「ト」や「ド」に変更してしまっている (3) などがある。田中・佐々木 (1985) の指摘するように「ヅをトに」直したことは間違いないが、中間段階があるようで、「ヅ (/ ツ) → ツ / ツ → ド / ト」というように変化していく様子が見受けられる。

5. 2. 2. /ci/ および /t/ の表記

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) チ → ツ

マチヤントノ	マチヤントノ	マツアントノ	町奉行	maciyan tono	町奉行
--------	--------	--------	-----	-----------------	-----

シユチ	シユツ	シユツ	母の母	sut/ suci	祖母
マチカルク	マツカルク	—	兄弟の娘	matkarku	姪

(2) ジ → ツ

コンジ	コンツ	—	帽	konci	帽子、頭巾
-----	-----	---	---	-------	-------

ここでも、田中・佐々木 (1985) の「チをツに」直したという指摘は間違いないようで、(1) を見ると「チ → ツ」と変更していることが分かる。そのほか、(2) のような「ジ → ツ」という変更も見つかった。

5. 2. 3. 二重母音の /y/ の表記

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) イ → エ

アノカイ	アノカエ	アノカエ	其方	anokay	あなた (敬称)
ヲコイマ	ヲコエマ	ヲコエマ	小便	okoyma	小便する

(2) イ → エ → イ

ヲツカイ	ヲツカエ	ヲツカイ	男	okkay	男
ヘカイ	ヘカエ	ヘカイ	老るもの	hekay(e)	老いる

(1) は、まさに田中・佐々木 (1985) の「二重母音の y にあたるイをエに直したり」にあたる例である。しかし、これには続きがあったようで、「蝦夷語和解」に至って「イ」に戻る (2) のような場合もある。この理由は明らかではないが、加賀家文書の表記法として /y/ は前の母音が /a/, /e/, /o/, /u/ のどれであっても「イ」と「エ」で表すことが可能なので、伝蔵としてはどちらでも良かったのかもしれない。最後の「ヘカイ」の例のみ /ye/ を表しているかもしれない例で、樺太や沙流に見られる *hekaye* か、幌別や宗谷に見られる *hekay* のどちらかの語形を表していると考えられる。

5. 2. 4. 長音の表記

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) 有 → 無

エントーカモ イ	エントーカモ イ	エントカム (モ) イ	公儀	Énto kamuy	江戸の役人
バンチョー	バンチョ	バンチョ	大工	páncō	大工

(2) 有 → 母音

チー	チー	チイ	陰茎	ciyé	～の陰茎
----	----	----	----	------	------

(3) 有 → 有 (位置変更)

エツー	エート	エート	鼻	etú	鼻
-----	-----	-----	---	-----	---

(4) 無 → 母音

チポグル	チホグル	チホヲグル	船方	cipókur	船乗り
------	------	-------	----	---------	-----

4.5.1 節で長音とアクセントの対応関係について触れたが、ここでも対応関係を見るためにアクセントのある位置をローマ字表記の箇所でも明示した。さて、田中・佐々木 (1985) は「長音符号を省いたりなどの訂正もなされている」と指摘しているが、(1) はまさに、長音符号を省いた例である。アクセントの来る位置と長音符号の位置が異なっていることから、伝蔵が意図的に長音符号をとったのかもしれない。

また、(2) から (4) は田中・佐々木 (1985) では指摘されていないもので、例えば (2) で長音符号が「イ」という母音になっているのは *ye* という音素を表したものと考えられる。(3) は長音符号の位置が変更された例だが、*etú* のアクセントの位置を考えても変更する理由はないはずのものである。無理やり解釈すれば、*e=étu* で「お前の鼻」と考えられなくもないが、どうしてこの語だけ人称接辞の *e=* (「お前の」) が付いているのかという説明ができないため、やはり不自然としか言いようがない。

(4) は、母音を用いた長音表記のように見られる例で、もともと長音符号がなかったところからの変更である。加賀家文書の場合、音節末の *-p* は「(ッ) フ/ブ」などで表されるため、本来は「ホ」だけで *po* という音素を推定できる。あえて「ホヲ」に変更したのは、*p* の後に母音の *o* があるということを明確に示すための工夫だったのかもしれない。

5. 2. 5. 半濁点・濁点の表記

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) 半濁点→無/濁点

ニシパ	ニシハ	ニシバ	貴人	nispa	旦那
ポンチヨ	ホンチヨ	ホンチヨ	子供	ponco	男の赤子
トーカプ	トーカブ	トーカブ	乳	tókap	乳
フツプ	フツブ	フツブ	腫	hup	腫れもの

(2) 無 ⇔ 濁点

子トバケ	子ドバケ	子ドハケ	身	netopake	身体
ハポ	ハボ	ハホ	母	hapo	お母さん

(1) で見るように、『藻汐草』で半濁点だった箇所は、濁点にするか、取り除くかのどちらかの変更を行っている。これは 4.3.2 節でも一度触れたが、伝蔵が半濁点の使用を好まなかったというひとつの根拠である。(2) は濁点が取られたり新たに付けられたりしている例

であるが、このような変更の理由は明らかではない。特に pa、pi、pu、pe、po の音素を表すハ行とバ行の間では交替が生じやすく、伝蔵が筆記した資料内で濁点の有無が異なることも稀ではない。

5. 2. 6. 音節末の子音の表記

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) 音節末（語末）の /p/ の表記：ツ → フ/ブ；ツペ → ツベ → ツブ

テン子ツ	テン子フ	テン子ブ	童子	tennep	赤ん坊
ヲトツペ	ヲトツベ	ヲトツブ	髪の毛	otop	髪の毛

(2) 音節末の /t/ の表記：ル → レ

ヲロツコウタル	ヲロツコウタレ	ヲロツコウタレ	ヲリカタ辺の者	Orokko utar	オロッコ人
---------	---------	---------	---------	-------------	-------

音韻語の語末の p は、4 節の規則 (13) と (17) で示したように「— (ッ) フ/ブ」と表される。(1) はその規則に準じた変更と言える。(2) は個別的な事例で、utar は「ウタレ」と表記するように決めているのか、伝蔵は常にこれを「ウタレ」と書く。

5. 2. 7. その他

藻汐草①甲	藻汐草 [写] ③	蝦夷語和解④	見出し	ローマ字	現代語訳
-------	-----------	--------	-----	------	------

(1) へ → セ：カ → セ

へカチ	へカチ	セカチ	若いもの	hekaci	男の子
マチ子へカチ	マツ子セカツ	マツ子セカチ	女子	matne hekaci	女の子
カンピシシヤム	カンビシシヤム	センビシシヤモ	筆者	kampi sisam	(筆者)

(2) 無 → ン

ヤハシヤモ	ヤハシヤモ	ヤハシヤモ	平人	yayan samo	普通の人
ヅムウエ	トムウエ	トモウエン	疾	tumu wen	病気になる

(3) モ ⇄ ム

カムイ	カムイ	カモイ	神霊	kamuy	神
コタンカラカモイ	コタンカラカムエ	コタンカラカムイ	阿弥陀如来	kotan kar kamuy	国創りの神

(1) に関連することでは、金田一 (1938 : 48) が松前、津軽、秋田の人は「へをセに訛」

ると述べ、佐藤 (1990, 1995) がこれについて例を挙げるなどして方言の影響について検討している。伝蔵は秋田出身であるので、やはり /he/ を「セ」と書いてしまったのであろうか。佐藤喜代治 (1963) の秋田方言の記述によると「/he/ の場合にはそのほかに硬口蓋でも摩擦を伴うような音も聞かれる」とあり、「蛇」が「 [ϕhe˜bi] /hebi/ 」、「尻」が「 [ϕee˜] /he/ 」になるのだという (p. 13)。また、/se/ についても秋田の八森は「口蓋化子音」になりやすい地点であるようで、「背中」が [ʃe_naka]、[ee_naka]、「汗」が [aʃe_] や [ace_] になるという (p. 20)。hekaci の /h/ は [ϕ] という両唇摩擦音は聞かれないため、「セ」のほうが適切と判断したのかもしれないが、用例数を集めて再度検討したい。また、(1) の「カ」が「セ」になっている例は、写し間違いの可能性も高いのだが注意を払っておくには越したことはない例である。

(2) については、撥音便の「ン」が新たに加えられた例である。これは「ン」があったほうがアイヌ語の音素と対応しており、伝蔵が修正したものと思われる。tumu wen の mu が「ム」から「モ」に変更されているのは、(3) のように「モ」と「ム」が交替しやすいからである。

このほか、語形そのものが変わっていることもあれば、ここで示すことができなかった種々の修正も存在するが、今後の調査課題としたい。

(付記) 本稿は、千葉大学大学院人文社会科学研究所における全体研究会 (2012年9月25日) にて「アイヌ語根室方言の文献学的研究: 「加賀家文書」における表記の特徴」という題で報告した内容から、主な対象資料を増やした上で大幅な加筆・修正を行ったものである。

引用・参考文献

- 秋葉実 (編) (1989) 『北方史資料集成』2. 北海道出版企画センター.
- 旭川アイヌ語研究会編 (2011) 『アイヌ語別海地方資料集成: 蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②現代語訳』小樽教育地図研究会.
- 奥田統己 (1998) 「アイヌ語静内方言の母音間の /w/, /y/ および // について」『ユーラシア言語文化論集』1. p. 258. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 金田一京助 (1913) 「あいぬ物語付録樺太アイヌ語大要」(金田一京助 (1993) 『金田一京助全集第五卷』三省堂).
- (1917) 「蝦夷語学の鼻祖 上原熊次郎とその著述」『芸文』(『金田一博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』(1960 [3版 1976]) , pp. 495-523. 三省堂).
- (1924) 「世界最古の蝦夷語彙: 佐々木博士所蔵の『松前の言』について」『心の花』(『金田一博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』(1960 [3版 1976]) pp. 483-494. 三省堂).

- (1931) 「アイヌユーカラ語法摘要」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究2』東洋文庫.
- (1938) 「シーボルト先生とアイヌ語學」『シーボルト研究』. pp. 353-426. 岩波書店
- 佐藤喜代治 (1963) 「秋田県米代川流域の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』1 (井上史雄他 (編) (1994) 『日本列島方言叢書④：東北方言考③』ゆまに書房).
- 佐藤知己 (1990) 「武四郎のアイヌ語学：嘉永三年「蝦夷語」について」松浦武四郎研究会 (編) 『北への視覚』. pp. 148-181. 北海道出版企画センター.
- (1995) 「「蝦夷言いろは引」の研究：解説と索引」『北大言語研究室報告』8. 北海道大学文学部言語学研究室.
- (2007) 『『藻汐草』の「一冊本」について』『北大文学研究科紀要』121. (佐藤知己 (2009) 『古文獻によるアイヌ語史の構築』pp. 2-29. 北海道大学大学院文学研究科 所収).
- (2008) 『アイヌ語古文獻における言語学的諸問題』(佐藤知己 (2009) 『古文獻によるアイヌ語史の構築』pp. 2-29. 北海道大学大学院文学研究科).
- 白石英才 (1998) 「アイヌ語高母音の半母音化とわたり音挿入：最適性理論による分析」『ユーラシア言語文化論集』1, 196-221. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 成田修一 (1985) 「江戸時代のアイヌ語」『言語』14/2. 大修館.
- (1988) 「江戸時代の蝦夷語彙集概観および『蝦夷語集』の表記について」『二松舎大学人文論叢』38 (ゆまに書房編集部 (編) (2001) 『アイヌ語考①』ゆまに書房).
- 田中聖子 (1989) 『『蝦夷言葉』の「義経浄瑠璃」について：近世のアイヌ口承文芸の記録に関する一考察』『早稲田大学語学教育研究所紀要』38. 早稲田大学語学教育研究所.
- 田中聖子・佐々木利和 (1985) 「近世アイヌ語資料について：とくに『もしほ草』をめぐって」『松前藩と松前』24. pp. 17-32. 松前町史編集室.
- 田村すず子 (1998) 「アイヌ語北海道方言の発音」『アイヌ語北海道南部方言 基礎編』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (1999) 『アイヌ語音声資料 10 カタカナ版』東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子他 (1998) 「沙流地域の話者の発音」『アイヌ語資料の整理と分析研究』早稲田大学語学教育研究所.
- 知里真志保 (1942) 「アイヌ語法研究：樺太方言を中心として」(知里真志保 (1973 [1993]) 『知里真志保著作集3』平凡社).
- 深澤美香 (2013) 「加賀家文書翻刻・現代語訳1 「菊のかんざしみだれ髪」：蝦夷通辞によるアイヌ語版「お吉清三」口説」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』15. pp. 295-321. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 別海町郷土資料館 (2005) 『加賀家文書 現代語訳版』5. 別海町郷土資料館.
- (2012) 『別海町郷土資料館所蔵資料目録第1集 加賀家文書等資料目録I』別海町郷土資料館.

北海道ウタリ協会(1994)『アコロ イタク AKOR ITAK アイヌ語テキスト1』クルーズ。
Batchelor, John (1887) A Grammar of the Ainu Language. In Chamberlain, Basil Hall, *Language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies*. (1887), Tokyo:Tokyo Imperial University.

Bronisław, Piłsudski (1912) Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore. In Majewicz, Alfred F. (ed.). *The Collected Workes of Bronisław Piłsudski, vol. 2: Ainu Language and Folklore Materials*. (1998), Berlin: Mouton de Gruyter.

Dixon, R.M.W. (2010) Grammatical Word and Phonological Word . In *Basic Linguistic Theory, vol.2: Grammatical Topics*. New York: Oxford University Press.

資料 (加賀家文書に関しては資料番号順)

上原熊次郎 (1792) 『藻汐草』 ((1972) 『成田修一撰 アイヌ語資料叢書 藻汐草』 国書刊行会).

加賀伝蔵 (成立年不詳) 「西松おその」 『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①]』 (資料番号 28).

———— (1844-1863) 『御手本』 (資料番号 31).

———— (?) (1804-1818) 『イロハ蝦夷言』 (資料番号 38).

———— (1860) 『役土人申上和解書扣上』 (資料番号 39).

———— (1860-) 『学校往来夷解書上』 (資料番号 40).

———— (成立年不詳) 『蝦夷方言 藻汐草 [写]』 加賀家文書館所蔵 (資料番号 49).

———— (成立年不詳) 『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②]』 (資料番号 51).

(ふかざわ みか・千葉大学大学院人文社会科学研究所)